

⑰ 『貧者の一灯』

若い門番に促されて関所の門を通り抜けると、ミチはかがり火を背に浮かび上がった青年に向き直った。ほっそりとした肩が初々しく、弟の多門次より少し年上かと思われた。

「ご恩、生涯胸にとどめおきます。有難うございました。」と礼を述べたミチに、青年は両の手を袴に添え、肘を張って丁寧な黙礼を返しながら

「お急ぎになつて下さい」と言い足した。

若いが礼儀を心得ている。しかも、他人への優しさも備えている。黙礼をする青年の姿に、育った家庭の様子や両親の面影を見る思いがした。

長府の家を出る折、通りに出てミチを見送った多門次がその若い関守の姿に重なった。多門次に助けられたのだと思つた。

上弦の月が、ほの明るく行く手を照らしていた。

北国日和定め無しとはよく言つた。翌朝、宿坊の屋根を打つ雨音で目が覚めた。

微かな音だったが、仮寝の暮らしを続けている内に、僅かな音にも敏感になつたようだ。

そろそろ朝の勤行が始まる時刻だろう。数人の相部屋をそつと抜け、本堂へ向かおうと廊下へ出たところで、手燭の明

りの中に一人の僧を見かけた。

おやつ、と思つた。

その気配に気づいたのか、ミチの方を振り向いたその僧が「やあ、またお会いしましたね」と言いながらミチが近くのを待った。

大津の石山で一茶の話を聞かせてくれた啓雲という壮年の僧だった。

「昨夜、山門をくぐる姿を遠目に見かけ、或いはと思つていましたが、矢張りそうでしたか。石山でお会いした時は、確か美濃へ行く、と聞いたと思うのですが・・・」

そう言つた後で、関所は無事に通れたか、と尋ねた。

啓雲によると、関所の門が閉められたのは、先年越中で大規模な百姓一揆があり、今年も又、直訴の一群が加賀を抜け越前に向かおうとしているらしい情報が入つたからだ、と云う事だった。

武蔵の国で大水害があり、米不足が深刻な状況になつてい

るらしい事は、ミチも行く先々で小耳にはさんでいた。その所為で、あちらこちらで一揆が起つている事も知つていた。ただ、その影響が、関の戸を閉められるという形で直接我が身に及ぶとは、全く想像もしないことだった。

啓雲は続けた。

「私は越中虫谷村の出だが、今回の騒動の中心は、どうも虫谷の者達のようなのです。石山でお会いした後は高野山に

留まっていたましたが、村の衆を死なせるわけにはいかない。何とかせねばと思いい村へ帰る途中です。」

「直訴に向かったのが虫谷の者なら、残っている者達も無事ではすまない。何らかのおとがめを受けるでしょう。軽い仕置きで済めばいいのですが、投獄や死罪となれば、女や子供達だけではとても生きてはゆけまい。愚僧の一命に代えても村を護らねばならない。」

戸口に腰を降ろし、ワラジの紐を結びながら啓雲はこうも言った。

「私の父親も、一揆を企てて死罪になりました。そのあと残された母親と私の暮らしは、まるで人間ではありませんでしたなあ。一年後に母親がやせ細って枯れ枝のようになって死んでしまい、一人になった私は、何の当ても無しに村を捨てました。六歳でした。四日歩いて、滑川の寺の前で倒れていたところを住職に助けられました。そのあとは、他にも苦しんでいた人達がいたのに、村を捨てたことがずっと重荷になっていましたね。四十六年の生涯ですが、今は村のために捨てる構わないと思っています。」

そう言つて立ち上がると、啓雲はミチを見てにっこりと微笑んだ。

生まれ育った田耕の穏やかな暮らしとは余りにも違っている。飢饉や一揆の話は、どこか絵空事のように聞いていた気がする。啓雲の話は鉄杭のように鋭くミチの胸に突きささ

った。

ミチは啓雲の話聞き流すことが出来なかった。夫を亡くし、生きてゆく希望を失った瞬間はあった。だけどそれは個人的な話。家族や村が死と向かい合っているのはまるで話が違っている。

ミチはやにわに自分の懐に手をつまむと、巾着を取り出して啓雲に押しやり

「僅かしか入っていませんが村人のためにお役立て下さい。米が無理でも雑穀なら多少は買えるでしょう。」と言った。

「いやいや、それは困ります。あなたの大切な路銀でしょう。」

「私も雲水、お構いなく。それに、長者の万灯より貧者の一灯の方が村の人達を勇気づけられるかもしれません。」